

オンラインでの卒研指導とポスターによる 卒研発表会の効用

人間心理学科 森 平 直 子

卒研指導で大切にしていること

卒研（本論では「卒業研究」をこのように表記する）に取り組む意欲を1年間保つためには、本人が興味をもったテーマと抱いた問いを追究できるようにサポートすることが重要である。その上で筆者が指導上大切にしているのは研究や論文執筆の「型」を身につけさせることである。研究者であれば当然のことだが第1に、「現象の記述」と「筆者の考え」の区別を徹底することである。また第2に、研究倫理に則ることである。文献引用の仕方を厳密に指導する。その結果、ほとんどの学生が見事に多数の文献を引用しつつ論点を絞って自らの問いに答えを見出すという論文に仕上げることができた。今年度、ある学生は、先行研究を中心に38本もの文献を非常に適切に引用して概観した上で自らの行ったインタビュー調査の報告をしており、そのテーマの研究のレビューとしても有益な論文となった。またヒトを対象とする研究を行う学生が多いため、大学の倫理委員会による審査を事前に受けることによって、たとえ学部生であっても1人の研究者として責任があるという自覚を持たせることができた。このような論文執筆や研究の「型」を身につけることは大学院に進学する学生はもちろんのこと、高等教育を受けた社会人として卒業後にどこかで生きてくるに違いない。

オンライン会議システムとLMSの活用の大きなメリット

コロナ禍で必要に迫られて使い始めたシステムであるが、筆者としては最多の11名のゼミ生の研究と論文執筆を指導することになった今年度、大きなメリットが見出された。年度当初十分指導ができるか不安だった中、予想以上に立派な論文を書き上げた学生が少なくなかったのは、卒研指導にこれらのシステムを活用することができた

からこそである。

学生達には、3年次の年度末のテーマの選定から始まり、文献リスト作成、調査用紙や実験計画の作成、そしてもちろん卒論本文や卒研発表会のポスターまで、素案や下書きの段階から仕上げまで、LMS（本学の場合は株式会社朝日ネットのmanaba）に提出させた。その際メンバー全員が閲覧・コメント可能という形にしておく、お互いが提出したものを見ることができ、教員が他の学生の提出物にコメントをしている内容も見ることができる。さらに、ゼミは毎週オンライン会議システムを使用して行ったため、提出されたものを画面共有し、その場で、コメントをしながら教員が加筆修正してみせることができるため、他の学生も修正のポイントや正しい形式を具体的に学ぶことができる。一人の学生の指導に90分間のゼミの大部分を使ってしまって、指導された学生が「他の学生に申し訳ない」と言うこともあったが、他の学生達は、たとえ自分が直接指導されなくても十分参考になるので問題ないということだった。実習や就職活動との両立で大変だった時期でも、週1回のオンライン会議によるゼミには1年間ほとんど欠席者がなかった。調査用紙の作り方や、統計ソフトを使っの解析の仕方、WordやExcelの便利な機能の使い方なども、LSMの掲示板で教え合うなど、相互の支え合い・学び合いが上手く行われていた。

自分の拙い文章が画面共有されて晒し者のようになって、時には教員にことごとく修正されるのを他の学生に見られることには抵抗を感じる学生もいるかもしれない。それについては、3年のゼミからのつながりも功を奏したかもしれない。3年の春学期は構成的グループエンカウンター（自己理解・他者理解を促進し信頼関係を築く心理教育の手法）なども行い、ゼミ生同士の相互理解を深めつつ、自分が書いてきたものを小グループで発表して意見交換をして学び合うという形式を取り、秋学期には全員を前にしてプレゼンテーションを行い、全員がその場でLMSにコメントを書いて発表者に送るということも繰り返してきていた。そのため相互に学び合うゼミの仲間という一体感が醸成され、4年次にオンライン中心のゼミになっても信頼関係を基盤として相互に学び合うことができたと考えられる。

卒研発表会の効用

今年度、人間心理学科では、初の試みとしてポスター発表の形で卒研発表会を行った。筆者のゼミでは、3年生と4年生の双方に、LMSで感想を提出させた。

4年生は、多くの人が自分の研究に興味を持って説明を聞いてくれたことを非常に嬉しく思った様子で、達成感を高め、自信につながったようだった。また研究プロセ

スを共有してきた同じゼミの学生の最終的な結果や考察を知ることができて良かったという感想や、他のゼミ生の研究に触れて新たに学ぶことができた、自分と似たテーマで違う切り口で研究している発表があり勉強になった、という感想も見られ、さらに学びを深めることにつながったようであった。

3年生には自分の卒研のテーマ探しのためにもできるだけ沢山の発表を見るよう指示し、その中で印象に残った研究について概要や感想を書いて提出させた。沢山の研究に興味を抱き、熱心にポスターを読んだり説明を聞いたりしたようで、「とても充実した時間だった」「有意義な時間だった」「どの発表も興味深く、読み込んでしまった」「興味のある研究が多く時間が足りなかった」「自分の卒業研究に向けて、やる気と自覚が持てた時間になった」「自分も本当に関心があるものをテーマにしたいと思った」などの感想があり、3年生の卒研への動機づけを高め、卒研というもののイメージを明確にする上でも非常に有意義であった。

オンラインの活用によりゼミ生相互の学び合いが進めやすくなったことに加え、卒研発表会が、先輩や同級生から多くのことを学ぶ有意義な機会となったことがわかった。発表会に参加した上で卒業研究のスタートラインに立った現在の3年生は、さらに良い卒業研究を進めるであろうと期待している。